
DNAクラブ！！

百鬼夜光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DNAクラブ！！

【Zコード】

N7471J

【作者名】

百鬼夜光

【あらすじ】

「卒業したくば勝利しろ。進級したくば勝利しろ。

他者を蹴落としてまで手に入れる勝利こそに真価がある」

…さて問題だ。こんな戯言を全校生徒の前で堂々と宣言したバカはどうのどいつでしょうか？

正解は、我らが生徒会長でした。

集結するバカ共

俺の名は赤石和希。あかいし かずき 今回の物語では某大人気アニメの〇ヨン的な存在だ。俺が今いるこのクラスは、風下高等学校の1年A組。ちょうど入学式も終わり、帰る者は帰り残っている者は残つて話をしていた。

「ああ、退屈だ…」 そう嘆いてばかりの毎日だった中学校生活も終わりを告げ、今日から楽しい高校生活を送るとばかり思っていた。だがそれは大きな間違いで、実際は何も変わらない。教師の話もベタな内容だし、校長の話はどこの学校でもクソ長い。

「まったく、義務教育を過ぎてもこれが。世も末だな」 窓の外を見つめながら俺はつぶやいた。だが、

「そりんな退屈を解決しちゃいましょうーー！」

奴が来た。奴は俺の顔を人差し指でつつきながら更に続けた。

「首垂れてしょげてんなって。先が見えないだろ」

「いや、首垂れてないけど。でもお前にしちゃいいこと…」

「つて、アムドライバーのOPでもいつてるだろ」

「結局アニメンかよーー！」

奴の名は黒谷昭彦。くろたに あきひこ 自称オタクのアニメバカで、小学校からずっと同じクラスだった。

「でも解決つて言つたつて、どうやつてだよ」

「部活作り」

「よしわかった。とりあえず精神病院に行こう。いい医者を紹介する」

「お前は地獄に行くか? いつから俺は精神不安定者になつた

「はあ… で、どんな部活をだ?」

「DNAクラブ」

「それはエスオーロス団のパクリと受け取つていいのか?」

「ああ」

「一応聞いておくが何の略だ？」

「『Don-t Normal Amusement』『ドントノーマルアミューズメント』。普通じゃない娯楽」

「結構まともだな」

「だろ！？ そだろ！？俺も気に入ってるんだ！…ドントノーマルは造語だけど…！」

「でも入らんぞ」

「そのはいかん」

「こいつは何を言つてゐるのだらう。俺は確かにキヨ○ン的な役所だが、彼同様に

わけのわからん妙な団体に入るには御免じあん被りたい。

「これを見る！！」と昭彦が突き出したのは再来年までの生徒会メンバーが書かれたA4用紙だった。でもおかしい。

「生徒会なんてまだ決まつてもいいだらう？なぜお前がこんなものを持つている」

「俺の手にかかるば校長を操る事など赤子の手をひねるよつなもの。今年から数えて3年分の生徒会メンバーを勝手に決める許可を得るのもまた然しかりだ」

「入学初日に校長を操るお前はある意味で天才なのかもな」「と、いうわけで今年の生徒会役員その2はお前。ちなみにその1は俺な」

御免被れなかつた。ああ、今ほど自殺を志願した事は生まれてこのかた一度も無かつただろう。…どこかに拳銃とか転がつてないかな。

「5時に旧体育館で待つてて！一秒でも遅れたら公開羞恥プレイな

！」

昭彦は満面の笑みでそう言い残し、風のように走り去つた。
明後日の方向を向く俺には、既に嫌な予感がしてた。とうとうこの学校にも吹き荒れるのか。昭彦という超巨大台風が。…5時って言つと放課後だよな。しようがない、行くか。

さて、ここは放課後の旧体育館。本当は来たくなかつたのだが、昭彦は有限実行という言葉をそのまま擬人化したような存在であり、言つた事は全て実行しなければ気がすまないやつなのだ。俺も俺とて弱冠^{じゅうかん}16才で羞恥プレイは避けたいため、こうしてしぶしぶ来てやつたのである。もう一度言うが、ここは旧体育館。防音完備で更に暗幕を閉めれば外からは何も見えないこの空間には、謎の機械が「ごろごろ」転がっている。…ここ学校だよな？米軍のA級軍事基地とかじやないよな？

「DNAクラブ3人目のメンバーはこいつだ！！」

昭彦がとてもなくうれしそうにある男を連れて来た。

「よう！…石和！！」

「慎一…お前も巻き込まれたのか…！」

こいつの名は稻村慎一^{いなむらしんいち}。空気を読めないダメ人間で、別名エアクラッシャー。こいつもまた小学校から同じクラスなので、どんな奴かはハッキリとわかる。

「なんでまたお前が？」

「来ちゃいけないのか？」

「いや、いけないってわけじゃないけど」

「じゃあいいじゃん」

「…まあな」

慎一から田を放し俺は、昭彦の顔を睨みながら問い合わせた。

「お前、また脅迫したろ」

すると昭彦は怪しい笑顔で空を仰ぎ^{あお}、「どうかな」と一言だけ言い返した。

その言葉には確かに悪意が込められていた。

集結するバカ共（後書き）

百鬼夜光です。

さあ始まりました、百鬼夜光作品第2弾。

今回はカジノ・ポリスからキャラの流用をさせてもらいました。
すみません。キャラの名前が思い浮かばないものですから…
とにかく、第2弾も生温かい目で見守ってください。よろしくお願
いします。

ついあえず全国の生徒会に謝り

次の日、本格的な活動が開始された。

会長さん曰く「変わった遊びをする部活」らしいのだが、何をする気かさっぱりわからない。もともと、この部活は生徒会としても活動しているため学校側に迷惑がかかるような大きな事は出来そうもないがな。

「最初のゲームはこれだ」

昭彦が黒板に「ゴン」「ゴン」と音を立てて何かを書いた。

「えーと、『いし…か…す…い…じ…め』っと」

「ちょっと待て！何書いてんだ昭彦！って言つたか慎一ーお前どこから持ってきた！そのいかつい兵器！…」

「「なぜ待たなければいけない？」」

120mmマシンガンと小型ビーム砲をそれぞれ構えた2人の悪魔が口を尖らせる。

どうやら俺が止めなければ本当に殺る気だつたらしく。ここから…「とにかく何かほかのにしる。ほかのに」

「よーし。じゃあこれだ」

黒板に書かれた遊び。それは、『大爆笑ビデオ3連発』なるものだつた。

妙な寒気が背中をよぎる。

「このゲームは、『ただ単に面白いことをビデオに撮影して、コ

「動画に投稿しよう！』』というゲームだ」

「時間があればこそできる究極の暇人専用ゲームだな」

「まあそう言うなって。じゃあスタート！…」

1番手：慎一 タイトル『オヤジギャグを語つてみた』

「どーも。最近布団がふつ飛んだS.i.n.dです。

いや～、アルミ缶の上にありますニカンといつのはおそりしゃ～。

ロシアの殺し屋と同じくらい恐ろしや～。あ、でもナイスな椅子に座つていればそうでもないか。といひで……

「…………うわあ

「変な声吹き込むなよ！撮り直しなになつちまつだらー。」

「あ、いや、その…いいや。撮りなおさなくて。と、とってもおもしろかつたし…ね」

「そう…だな。うん。よ、よーし！次は俺の番だ！」

「おー！やるか石和ウ～！」

「おこ待てよ！俺の動画は！？」

「「とつても面白づいたきました」」

「なんで丁寧語！？まあ…そうか？面白かったか？やっぱりな～。俺も自信あつたんだよ、今回のギャグ。特にさ…」

よかつた。筋金入りのバカで。

なんというか、こいつアレだな。新世紀アホングリオン。スベッちゃだめだスベッちゃだめだスベッちゃだめだスベッちゃだめだ…なんてな。

2番手：俺 タイトル『いつもの風景』

「おい昭彦。そろそろ飽きてこないか？」

「それもそうだな」

「うわ！自分勝手！俺いじめられただけ！？稻村慎一はサンドバ

ックじゃないよ！？」

「「なんだつてええええええ～？そ、そうだったのか！？」

「なにその新鮮な反応！君たちは俺をサンドバックだと思い込んでいたらしいな！」

「「はい！世界共通の常識でありますー（キリッ）」」

「『キリッ』じゃねえよー無駄にさわやかな笑顔やめひよー・氣味悪

いー！」

「『さて、[冗談は]のくら』にして…」

泣きながら走り去る慎一。それを見ながら大笑いの俺たち。まさにいつもの

風景だ。楽しいなあ。あ、ちなみに昭彦の動画投稿は慎一逃走により中止となつた。べ、別に作者が思い浮かばなかつた訳じゃないんだからな！か、勘違いするなよ！

：こほん。と、いうわけで、俺は優勝したのだが、賞品というのがまたぶつ飛んでいた。その名も『昭彦様の肩を叩ける券』。昭彦は懐からそれを取り出し、笑顔で手渡してきやがった。なんだろうな、この胸の高鳴り。人はきっとこの感情を殺意っていうんだろ？。
そうぞ。エジソンもザックリのナイスマイルを思つゝ上。

卷之六

卷之三

「二ノ丸へ。付一室……」

空から飛来したイ○ンクックのような奇声を発しながら昭彦は、保健室を求め走り去つていった。右肩を抑えていたのは何でだろう？

つていうか昭彦、

ついあえず全国の生徒会に謝りつつ（後書き）

遅くなりました。テスト期間終わつたんて投稿再開です。
まだまだ未熟なので、よろしければ感想にて評価お願いします。
ではでは。

RPGをひでエアギリギリの時、中級モンスターH�ンカウンタムヒトヨヒナ

放課後。部室に来た俺と慎一を待っていたのはゲームに熱中した昭彦だった。

「しまった！…さっきの所ででBではなくてAを選んでいればいまここでの話にならなかつたのに…あ、でもそしたらスペシャルカットが手に入らなかつた。とするとあの選択はあながちまちがえてはいなかつたか…いや待てよ。仮にあそこでAを選んでいたとして…」

わけのわからない言葉を「こよなく呟きながらパソコントローラーを操作しゲームを終わらせた昭彦は、

「石和！慎一！今回の遊びはこれだ…！」

と言つて、黒板に『色々とす』『ゲーム』と書いた。

「なんだこれ」

「いや実はさ、俺この前ゲーム屋でものすん』『ゲーム見つけたわけよ」

「で、俺にやれと」

「察しがいいな」

「断る」

「そうはいがん」

「まさか…」

「この手紙を公表されたくなかったら素直に言つことを聞け」「なんだこれ…」

「ふふふ

「な！？」

「ふふふ

「貴様！…いつたいビヒの手紙を…？」

「さて…・・・ビヒでしょつ」

「〇泉つぽいしゃべり方すんな…！」

「ど、いうわけで」

「わけだ？」

「言つことを聞かないと」

「聞かないと？」

「おーい、慎一ー。おもしれー物見せてやるよ」

「なになになになに」

「待て！…わかったー やるー やるからその手紙を衆目下せりすのはやめろ！…」

「そうこなくつちや」

昭彦は嬉しそうに駆け寄ってきた慎一を殴りとばした。

昭彦が用意したゲームは1人用のゲームで、3人でしゃべりながら俺のプレイを見るらしい。録画用カメラを嬉しそうにセットしている昭彦がそう言つていた。

慎一（以後慎）「タイトルは・・・『死亡村？』！？」

石和（以後石）「おい昭彦ーこの禍々『まがまが』しいタイトルはなんだ！即死か！？主人公即死か！？って言つたか『？』はどうした！『？』は！？いきなり『？』ってどうかと思つぞ！…」

昭彦（以後昭）「そんなことビツだつていい・・・（ア○ン風に）」
石＆慎「よかねーよ！…」

石「まあいいや。とりあえずプレイしてみよう」

ゲーム音（以後ゲ）「ショジンコウノナマヒラーユウリョクシテク
ダサイ」

石「か…す…れ…つと」

ピコン…！」

ゲ「ハツ！…しけた名前だな！…」

石＆慎&昭「！？」

ゲ「『カズキ』デヨロシイデスカ？」

石「今何か言つたよな！…しけた名前つて言つたよな！」

昭「いや…何を言ったか知らないが、いい事を言つていた気がする」

石「この野郎…」

ゲ「アナタハユウシャニナリ、コノセカイヲマオウノテカラスクッ
テクダサイ」

石「なんとベタな」

魔王（以後魔王）「我が名はカエル・ザ・ドコンジョー。貴様には死んでもらう…！」

慎「いきなり…？つづーか魔王ど〇性ガエル！？」

テリロリリン…！戦闘スタート…！

デンデンデン…魔王が勝負をしかけてきた…！

ゲ「カズキはどうする？」

石「まずは攻撃だろ」

ゲ「カズキは魔王に10のダメージを与えた…！魔王の攻撃…！カズキに

9 8 2 5 9 8 4 1 5 4 1 5 8 5 6 4 8 2 5 3 5 8 4 5 4 2 7 9 8 5
4 1 3 2 1 3 2 6 8 8 6 5 4 5 3 1 6 のダメージ…！

カズキは息絶えた

石「強…！魔王強…！何このチート…！」

昭「大丈夫。こんな事もあるうかと用意しておいたのだ」

慎「何を？」

昭「おい慎…。お前の手元に赤と青、2つのスイッチがあるだろ？」「…」

慎「んなもんないよ…って、あつた…？いつの間に…！」

昭「赤い方を押せ」

慎「いやな予感が…」

昭「心配するな。安全だ」

慎「本当に…？」

昭「ああ」

慎「じゃあ…えいつ…！」

昭「嘘だけど」

慎「…………………………」

慎一ぐはあ！！

突如現れたボ〇・サツナにより慎一は25mほど飛ばされた。無論、ボブ・〇ツプはすぐに退場した。

慎一 僕殴られ撲じやねーか!!」

昭二の妻レボタンをアチャッ！！

勇者がアキにかかみなきできた！！

石 おお！すこしい 大いに何をした！！

昭和には歯を歯には歯を

石川急便

昭和三十一年九月

有
い
か
意
味
な
い
と
思
う
だ
け

日本書紀傳 卷之三

ラヂオの収録

「アーヴィングの『西の王國』は、本一冊で、改編二二二二

「……………」全国の音ノースが「……………」

五「うおー竜王めつちやーーんじやん!!」

魔「ぐおおおおおおお!! そろそろ限界があああ

二十九

執事（以後執）「お呼びでしょうか、魔王様」

魔「私の屋敷を売り払い、その金をユーロセフに寄付してくれえええ

! !

執「しかし魔王様！屋敷の中には、魔王様が集めたお宝がたくさん・

魔「良い！！」

執「屋敷を売り払つてしまつたら、食品偽造をあばいたり、八百長を見破つたりしたあの努力がすべて水の泡に！！」

魔「良いと言つてあるのじやあああ！！」

執「……わかりました。では、ご冥福をお祈りしておりますピコーン。

魔「これで良かつたのだ…ガクツ」

魔王を倒した！！カズキは経験値を13手に入れた！！

石＆昭＆慎「…………」

石「なんか罪悪感たつぷりなんですけど

昭「珍しいな。俺も同意だ」

慎「つつーか獲得経験値少ねえ」

昭「でも、これで次のステージへ…」

そうだな。今回のステージはちょっと変わっていたんだ。そうに違いない。次のステージへ行けばきっと普通の敵と戦えるさ。…と、思っていたのだが、画面に現れたのはスライムでもなければキラーマシンでもなかつた。

たつた…たつた4文字である。

おしまい

石＆昭＆慎『終わりかよ！…』

RGアーケードギガの時、中級モンスターHANAKUNSTアーティストR

いつも。活動報告やその他の機能がひとつと使えるようになりましたってきた
百鬼夜光です。

まあ使えるとは言つても10分の2ぐらいですが（笑）。
さて、今回は少し長めに書いてみました。毎回観覧してくださる皆
様、本当にありがとうございます。一人でも見てくださる方がいる
とそれだけでやる気が出できます。評価の程をよろしくお願いしま
す。

新たな被害者がまた3人…ご愁傷様

さて、DNAクラブが結成されて約半年。特に何もする事が見当たらぬにぐだぐだと過ごすのにも飽きてきた。最近の趣味といえば、あれだな、現在進行形で着用中の制服の毛玉を素手で取り続けること。結構な暇つぶしになるし、掃除の手間も省ける。一度試してみてはいかが？

「…と、ここで会長さんのご登場だ。部室に入るやうやくもどり何かの準備を始めた所を見れば、今日は何かをするひじいといつ事は分かる。古代エジプトの太陽神ラーを呼び寄せよう、とか言つんぢやないだろうな。

「安心しろ。それはまた今度の機会だ」

今度やるのか。

「それより今田はミーティングだ。お前らも早く準備しろ」
ミーティング、という中学校の部活引退以来ほとんど聞いた覚えのない言葉に多少の思い出をフラッシュバックさせながら、俺はしぶしぶ机の上を片づける。

「それはそうと、ミーティングで何するんだ?」「今日は新入部員が3人もやってくる記念すべき日だ」

「」の目的不順でわけわからなくていつも勝手な事やつてる集まり

昭彦が青筋を浮かべる。

一生徒会と語学を両立している唯我独尊な集まりは三人も!?

「おまけに常人じや理解不能な馬鹿げた考えを無理矢理部下に押し付ける極悪非道な……」

最後に脳内で何かがはじけ飛んだ。

「ほう貴様、極悪非道な……なんだつて？ええ？」

「あ、いや、その……」

「ちーとシラ貸せや

「は、はいい！！」

「たつたつたつたつたつぱり遊んでやる」

「ひいいい！！」

バキッ！！やらメキヤツ！！やら、人間の体から鳴つてはいけない音がどんどん聞こえてくる。「つきよおおおおおおおおおおおお……！」と、いう断末魔の5秒後、見るに堪えない慎一の姿が帰ってきた。

「さて、本題に入る」

「ホントに3人も来たのか？」

「ああ。しかも、男子が1人で女子が2人だ！！」

「女子！？」

「驚いただろ」

「結構」

「前ふりはこの程度にして、これから歓迎パーティーを始める」「わーーーい！！」

無邪気に喜ぶ慎一。どうやらパーティーといつ言葉を聞き激しく興奮しているらしい。

「おーい、入つてこーい」

「「「はーい」」

と、ここで奴隸解放宣言直後の民衆よろしく上機嫌にスキップで入ってきた3人を軽く紹介しておこう。

1人目は、朝倉涼香。
あさくらすずか

肘まで伸びた長い髪に、眼鏡越しに見える大きくて黒い瞳。どこか怪しげな雰囲気を漂わせる彼女からは、幼馴染と思えない大人びたオーラを感じる。

次に2人目、笛吹音波。
うすいおとね

これまた長い髪をツインテールに結いである、見た目からするとあきらかなツンデレ。だが違うらしい（本人談）。

最後に3人目、笛吹宗介。
（笛吹宗介）

名前で推測できると思うが、いつは音波の双子の弟で、なぜか右と左の目の色が違う。カラコンでもしてんのか？

とまあ、こんな感じだ。ところで…

「何でこの3人なんだ？お前が推薦したんだろ？」

「いや、一年目の生徒会推薦は俺と石和とダメ人間の3人だ」

「せめて名前で…」

「黙れ。くたばれ。地獄に落ちる」

「ひどいや！」

「で、何で？」

「実はな、あいつらが3人一緒に俺の元へ頼みに来たんだ。『DN

Aクラブに入会させてー！』って」

「世の中には、科学で解説できないことがあるんだな…」

「どういう意味だよそれ！」

「だつてそうだろ。この奇妙奇天烈摩訶不思議な集まりに自ら入つてこようとする奴の存在など普通に考えているわけがない」

「ドラ もんのエンディングっぽい！」

「一足歩行可能兼人工知能搭載型国民的人気猫型便利機械の事か？」

「無理やり和訳すんなよ！そんなアニメあつても視聴率0%だわ！」

「で、結局どうして？」

「わからない。だからこれから聞くと思つ」

「なるほど。それがこの歓迎パーティーということか」

「その通り。よーし3人とも、この生徒会に入りたいと志願した理由を教えてくれ。あ、言いにくい場合はそこにある嘆きの穴へどうぞ」

昭彦が指さした所には汗だくの慎一と共に謎のボックスがあつた。指示される前に動いていた慎一の謎はノータッチで頼む。

「さて誰からだ？音波からか。そーかそーか

「ふえ！？な、何で私！？」

「さつすが我が姉貴！頼もしい限りだ！」

「がんばって！音波ちゃん！」

「宗介！？涼香ちゃん！？」

「じゃあどうする？あっち行くか？」「ここで言つか？」

「…あっちでお願い」

「りょ～かい！じゃあ行きましょうか、お嬢様」「

「…はふう。うまく説明できるかなあ…」

半分泣きながらもいかついボックスに拉致られて行った美少女を見つめながら、なにやら面倒な事が起きないようにと切に願う俺であった

新たな被害者がまた3人…」愁傷様（後書き）

お久しぶりでーす。百鬼夜光でーす。やつと更新できましたよー。
何で春休みに宿題つてあるんだろう。新学期の準備じやないのかよ…
まあ愚痴ばつか言ってても進歩がないので今回はこの辺で。
次の更新は早めにできるみうにがんばります。ではでは。

避けられない現実

「ボックス内（昭彦視点）」

「で、なんで入る？と思ったんだ？」

「それは…その…」

「もしかして、理由無し？」

「いや、そうじゃなくて…その…」

「はつきりしてくれ。後が詰まってるんだ」

「えと…何て言えばいいのかな…危機が…迫ってるの。DNAクラブに」

思わず眉を寄せ、首をかしげる。

「危機って…どんな？」

「TOS」

「なんだそりゃ」

「the reverse side of students association」

「もつとわからん」

「ザ・リバースサイド・オブ・スチューデンツ・アソシエーション。」

読んで字の「ご」とぐ、裏の生徒会のこと」

「裏の生徒会？聞いたことがないな。お前の妄想じゃないのか？」

「ううん。確かに存在する。だつてそいつらに対抗するため、私は

このDNAクラブに入会志願したんだから」

「つていうことはつまり、宗介も同じ理由で？」

「うん。でも、詳しい事は宗介から聞いて。私、何かを説明するの

苦手なの。…でも、これだけは言える」

音波はひとつ深呼吸をしてから、改めて口を開く。

「気をつけて。相手は本気でDNAクラブ全員を殺す気よ」

「…………」

「ありがとう。とりあえず次は宗介だな」

「やつと喉の奥からひねり出したのはそんな言葉だった。まるで音波から…いや、現実から逃げるよ！」。

まあ、実際にそんな訳のわからん団体があつたとしても、全員に鉄拳制裁を下してやるから大丈夫か。

♪ボックス外（和希視点）♪

妙に二コ二コしながら音波が謎ボックスから出ってきた。それと同時に宗介が椅子から立ち上がる。

「次は俺だな。ねーちゃんの事だから何も説明できないだろ？ なあ…結局俺が全部説明するのか…」

腕を組みながらゆらゆらと歩いて行く。元気なさそうだなあ。さつきスキップしてたのに。もしかしてドーピング？ 元気よく見せるための薬物乱用ってか？…ないない。

と、ひとりツツ「ミミをしている間に憂鬱そうな少年は暗い入り口に吸い込まれていった…

♪ボックス内（昭彦視点）♪

「TOSってなんだ？」

「…は？」

開口一番に尋ねてみた。詳しく教えてくれよ。

「TOSっていうのは…」

「ザ・リバースサイド・オブ・スクールデンツ・アソシエーション」「知つてんじやん」

「そこまではな。あと俺たちの命が狙われているって事も音波から聞いた。そこで、なぜ俺たちがそいつらに狙われなくてはならんのか、並びにその目的とは何かを教えてくれ」

「ああ。TOS…奴らは『裏の生徒会・TOS』として生徒全体の実に98%もの生徒に爆発的な人気を獲得している」

「98%!?俺たちの人気は何処へ?」

「さあな。お前らの人気なんぞカケラほどじやないのか?」

「何故に!/?ちゃんと生徒会として機能してるぞ!集会も定期的に実行してるし、部活動の部費だつてしまつかり管理している!なのに何故反感を喰らわなくてはならない!」

「落ち着け。少しごらいなら調べてある。…やつらは、お前ら生徒会のやり方が気に食わないらしい」

「やり方?何の事だ?」

「この学校には、『いじめ』が蔓延している…っていう事実を知らないだろ」

「ああ、知らない。例えばどんな?」

「理由もないのに誰か一人を集団でリンチしたり、毎日教師全員から無視されたり」

「そんな事が…ならば対処しよう。今からでも十分…」

「間に合わない」

「どうして?確かに気づくのは遅かった。だがこれから迅速に対応すればなんとかなるだろ」

「いじめ被害者の一覧に、『要 かなめはじめ 一』という名前があつた」

「要…名前だけは聞いたことがある。確かに、かなりの不良でみんなから嫌われている問題児だつたよな」

「どうやらそいつが長になつてTOSが誕生したらしい」

「おいおい。まさか問題児軍団相手に俺が勝てない、とか思つて間に合わないなんて言つたのか?」

「それは違う。一般人相手にお前が負けるハズがない」

「それはあれか?TOSってのは一般人じゃないってことか?」

「その通り。TOSはただの問題児軍団ではない」

「と、言つと?」

「奴らはわけのわからん異能力者達で、手から炎が出たり口から冷

氣を出したりと愉快な化け物の集まりだ。下つ端の方は一般人だが

「うわあ…何その中二病的設定。そんな奴らがいるんだつたら邪氣眼だつて実在するかもな」

「石和の右目がそうだ」

「…悪い。よく聞こえなかつた。もつ一度頼む」

「石和の右目がそうだ」

「よし、精神病院へ直行だ。腕の立つ医者を紹介しよう

「まてまてまて。一応シリアルスなムードなんだから正直に受け止めろよ」

「…はあ。で、なんだつて？石和の右目が邪氣眼？ハツ！「冗談は無しにしようぜ」

「冗談じやない。つていうか、邪氣眼なんていぐらでもあるわ。俺の右目も、慎一の右目もそうだ」

「俺は？」

「違う。それらしい氣配を全く感じない」

「ひでえ…何この絶望的な疎外感…」

「とはいえ、邪氣眼は所持している者によつて能力が違う」「そなのか？俺、邪氣眼つてネットでちよこつと見ただけだから、ほとんど知らないんだ。よかつたら教えてくれ」

「よし。じゃあ今日の夜、お前の家に行つてもいいか？邪氣眼の事と、今回の事件について詳しく話し合いたい」

「わかつた。…そろそろ潮時だろう。涼香を呼んできてくれ」

「了解。…おーい、涼香～」

宗介が嘆きの穴から出て行つた。今考えてみれば3人つて結構疲れ

るな…

…それにしても遅いな。ただ呼んでくるだけだろ？

「どうした。早く涼香を呼んできてくれ」

「いや、その涼香がいないんだ」

はあ？そんなわけないだろ。入会初日から会長に無許可で早退する

やつがいたら土下座でバツク転してやる。

どれどれ……

「おい、土下座して何を…ってうわあ！危ねえ！いきなりバック転すんなよー!つーか物理的におかしいだろその動きー！」

「はあ、はあ、ど、どうしていないんだ？」

「あ、あの、涼香ちゃんならバイトがあるから…って先に

2回転目に突入しようとした時、音波の声が聞こえた。いつの間にか全員ボックス内に入っている。

「そりだつたのか。ならば仕方がない。…よし音波」

「ん？ なあに？」

「今日の夜、宗介と一緒に俺の家に来い。慎一と石和もだ

「別にいいけど、何で？」

「TOSについて色々話したい

「TOS? 何だそれ？」

「いいから。お前と慎一には後で伝える

「なあ」

「どうした慎一？」

「おやつはいくじまで？」

「よーし今日はこれにて解散！」

「慎一以外』乙でしたまへ』

「ええ！？ 完全スルー！？」

さて、早く家に帰つて茶菓子の準備でもするかな。夜が長くなりそうだ。

避けられない現実（後書き）

ゞお～もお～。

あらすじで使つたセリフが未だ本編に出てこないDNAクラブ第5話でござります。

TOPにどんな奴らを出していいつか、正直悩みぢりではあります、いつも通り生温かに田で見守つてやつてください。お願ひします。

…できれば小説の宣伝の仕方も教えて下せー。

「『普通じゃなく遊び』やつでないな……」とかシッ！」んだり負け

「JRの話題で話が進みます。

「うるさい『普通じゃない遊び』やつてないな……」とかツッこんだら負け

「あー気持ちいい」

若干熱めの風呂に入り、半分夢見心地でつぶやく。今日も色々あつたな……

妙な組織の話もされたし、入会初日の美少女に逃げられるし。まあ、今田も今田とて、生き抜いたことに変わりはない。死ななくてよかつた。

『おにいちゃん！お密さんだよ～！』

つと。インター ホン 僕による改造済み が呼んでいる。とりあえず返事はしておこう。

…と思つた矢先だ。突然玄関の扉が開き、ラフな服装の4人組がかずかと侵入してきやがった。

「おじやましま～すつて、昭彦は一人暮らしか」

「昭彦～どこに隠れていら～」

「すでに包囲は完了しているのよ～…嘘だけど」

「出でこないならお前の秘蔵エロアニメ「レクションを全員に暴露するぞ～」

待て。アレはお前以外に見せる気のないシロモノだ、石和！

「つていうか、何でお前らがここにいる！？」

風呂から超速であがると、そこには首をかしげている4人がいた。

「何でつてお前…」

「行くつて言つておいたよな？」

「しかも来いつて自分から言つたわよね？」

「もしかしてお前…」

「「「大事な話がある事、忘れたのか？」」

「……………忘れるワケないだろ」

大事…えーと…帽子からハートポップマジックのタネについて？

違うよな。じゃあなんだ…あ。

「TOSとその他もろもろについてか?」「

「何故に疑問符?その他に何がある?」

「帽子からハトポツポマジックのタネつて知ってるか?」

「知らん」

「あ……そ……」

「いきなりなんだよ……じゃあ始めるか。宗介、頼む」

「了解。涼香がいない事については、後でまとめて話す。全員座って話が聞こえる隊形になれ」

「「「おー」「」」

「…………」

「……慎一。耳を塞ぐのがお前流話の聞き方なのか」

「……え? 何だつて?」

「ぶつ殺してえ……いいから慎一、真面目に聞け。これから俺たち笛吹コンビ、並びに鈴香の身柄情報を説明する」

「……わかつたよ。耳栓を外して……始めていいぞ」

「耳栓もしてたのか……こほん。じゃあ始めるぞ。昭彦、ルーズリー

フ用意しろ

そこらに転がっていたルーズリーフヒシャーペンを手にして、アイコントラクトで説明を乞う。

ちなみにTOSそのものと邪氣眼の存在については、ここへ来る途中2人の笛吹が石和と慎一に説明したらしい。

「俺、笛吹宗介と、その姉である笛吹音波、そして朝倉涼香について話そう。実は俺たち、ある組織に所属しているんだ」

「何て名前の組織なんだ?」

「邪氣眼所持者育成所…通称『育成所』だ」

「そのまんまだな……まあいや、その方がわかりやすい。続けてくれ」

「その育成所っていうのはな、邪氣眼を持つ者を育てるための学校のようなんだ。俺や姉ちゃん、涼香もそこのメンバー」

「じゃあ、お前ら3人は同級生みたいなもんか」

「あくまで『みたいなもん』だけどな」

「大体の事はわかつた。次は邪氣眼について教えてくれ」

「お~。邪氣眼っていうのは、特定の者にだけ使える特殊能力のことだ。そのため、ひとつひとつに違う名前と能力がある」「例えばどんなのがあるんだ?」

「そうだな……俺の邪氣眼は、無限跳躍と書いて『インフィニットジャンパー』。能力は空中移動」

「それって便利なのか?」

「えーっと、空気を蹴つて無限にジャンプする事ができたり、ホバリングで移動できたり。ちなみにホバリング時の移動速度は音速の約3倍だ」

「すげえ……他にも教えてくれ!なんか特殊能力って燃える!..」

「超電磁砲と書いて……」

「それは色々危ない気がするから言つな!..」

「こう、コインをだな……」

「やめれ!……そうだ!音波と涼香は?」

「姉ちゃんのは知ってるけど、涼香のは知らない」

「何でだ?お前らつて同級生なんだろ?」

「それが、なぜか涼香のは誰も知らないんだよ」

「みんなつて……育成所のやつらか?」

「ああ。育成所に所属する邪氣眼使いデータは、マザーコンピューターに記録されているんだ。でも、涼香のだけパスワードがかかっている」

「じゃあお偉いさんは知ってるんじゃないのか?」

「いや知らない。以前俺が立ち会つて解析に挑戦したんだが、寝ずに3日挑戦し結果は失敗。パスワードを知ってるのは涼香だけだと考えられる」

「そりゃ……じゃあ、音波のは?」

「本人が直々に解説したほうがいい。姉ちゃん、お願ひ」

「わかつたわ。私の邪氣眼は、至高の癒し手と書いて『トッヅプロン

ヒーラー』。能力は超回復

「何を回復するんだ？つづーか、回復だけじゃ戦えないだろ」

「確かに戦闘能力は低いけど、その分仲間の傷を回復できるから便利なの」

「ほう…で、涼香の邪気眼はやっぱりわからないのか」

「全てが謎に包まれているわ」

「やっぱりそうか。まあ、期待はしてなかつたけどな」

「悪かつたわね。これでも色々調べたのよ？例えば…」

『おにいちゃん！お密さんだよ～！』

「…密だ。悪いが後で聞かせてくれ。はーい、どちらがまだですか？」

「…今のは呼び出し音…引くわ」「」

「がつちやり…ってあれ？」

俺の目の前にいたのは小さな女の子だった。しかも普段からよく顔を合わせている…

「明日香じゃねーか！」

慎一の妹。その名を、稻村明日香いなむらあすかといつ。

「どうした？兄貴を迎えて来たのか？」

「んーん」

「じゃあ何の用でこんな所に来たんだ？しかもこんな時間にまだ10時過ぎだが、小学5年の女の子がうろついていいような時間じゃない。」

「アツキーに用があるの。2人っきりで話したいんだけど…ついて来てくれるかな？」

「別に構わないが…今は大事な会議中だから明日でもいいか？」「えっと…今からがいい。5分くらいで終わるから、ね？」

「…わかった。ちょっと待ってくれ」

俺は、事情を全員に話してから我が家を後にした。

「…で、どこまで行くんだ？」

「アツキーの家の前。あそこ公園」

「近いな。じゃあ行くか」

俺はあくまで保護者の意味で明日香と手を繋ぎ、我が家の目の前、この時間なら人も滅多に来ない公園までやつて来た。

「で、話つてなんだ？」

人=とねえ

俺から10メートルほど離れ、楽しそうにくるくる回る明日香。しばらく止まらないこと踏んでいたのだが、数秒後にその回転は止まつた。

「...は？」

瞬間、炎を纏つた

どうせ」しゃがみ頭を抱えると、その頭上をすさまじい勢いで明日香が通過する！

「かぎりでござったか」

かわいくウインクしつつ舌を出した。だが、俺の後ろにあつたはずの街灯は跡形もなく消え去り、代わりに残つたのは数えきれない数の破片と紅蓮の炎だつた。

「お前…その腕…」

明日香は右腕に目のような模様が浮かび上がり、
不敵に笑う。

元四

「四天王」？そんなものがあるのか？」

「知らないなら教えてあげる。TOSには、四天王と呼ばれるトッ

「クラスの邪気眼使いが4人いるの。で、私はその内の1人」
「つか、風下高の生徒じやないお前がなぜ丁つらー!?」

「それはマスターに聞いて。私は自分の欲望に従つただけ」

「欲望…？マスター…？何だよ、それ…？」

「それは教えないよ。教えちゃつたら面白くないもん。… わあ、そろそろ2発目いくよ。今度は外さないからね～」

- 59 -

くそ、足が震えて動かない！逃げたいのに逃げられない！」なんど
こうでオダブツはごめんだ！

絶叫した直後、俺の視界は真っ暗になり 田をつぶつたんだから当

まので……わが、[田口洋二]のかのよひに。

「この『普通じゃない遊び』やつてないな…」とかツッこんだら負け

久しぶりです！百鬼夜光です！

若干レー〇ガンをパクつているのは氣のせいです。

どこか似てたとしても他人の空似です。嘘つぱちです。

…こほん。というわけで、やってきましたTOS四天王一人目、

紅蓮のアスカ。

思いつきり中二病なところも無礼講つてことでお願いします。

それではいつも通り、評価＆ご感想をお願いします。

追伸：次の更新はもつと早めに頑張ります。

開幕前夜

「お～、浮いた浮いた」

つていうか、飛んでつた？いや、跳んでつたのか。

昭彦の体は言葉通り跳んでいった。もちろん、昭彦だけの力で跳んでいったわけではない。字の使い方でわかると思うが、一緒に跳んでいったのは宗介だ。

「音波、昭彦と宗介はどの辺まで跳躍したんだ？」

「さあ？ 多分、飛行機よりは高い所じゃない？」

「なるほど」

…………は？

（上空）

「うわあああああ！もうダメ！もうダメ！さすがに死んだ！」

「俺は死んだに違いない！だからふわっと体が浮いたんだ！」

「落ち着け昭彦。お前は死んでない」

「どこからか聞いたことのある間抜けな声が聞こえる！」

「ああ、落としてえ！ハヤブサの急降下速度より早いスピードで落としてえ！！」

「そのツッコミは宗介か！！」

「ああ。今お前は空を飛んでいる」

「それは見ればわかる。……ああ、影絵やりてえ」

「何だよ突然！？お前今TOS幹部と戦つてたんだぞ！？」

「そうか。俺は明日香に殺されかけて……まあいいや。とりあえず影絵やりて。

「8本足の犬」

「何その無駄にかつこいい影絵！？っていうか影できてねえし……」

「無意味な事をやり続ける、それがDNAクオリティ」

「ただのバカじやねえのか！？」

「何うぢや、じぢや言つてんだ。戦闘中だろ。集中しろよ。」

「ここは後で殴ろう。そうしよう」

無意味な会話を繰り広げるうちには気が付いた。

右目から齧し炎が出ている

「おしゃべり」

「俺たちは今どこの町にいるんだ？」

「うへ、棒を縦に並べて5万本ぐらへ

「それではどのくらいか見当がつかない」

「気にするな。俺もわからない」

「なまけもの」

「・・・そろそろだな。行くぞ昭彦！しつかり目に焼き付けておけ

۱۰۷

「二九三四年銀の本位幣」

これが牙氣眼の便い方かと思つゞ宗介の顎を覗くと、吉田

「フイーッ シュコンボ・
列脚強刃!!」

上がってきた時よりも圧倒的に速いスピードで急降下していく――！

真下にいるのは・・・

卷之三

地上

凄まじい速度で何かが何かにぶち当たった！！

本当に晴れるのだろうかと疑いたくなるくらいの量の土煙から顔を

出しながらは が口が口はなた た畠田齋が た 攻撃を食らつ 二枚ノゲ、 弱マソク茲々。

「『めんなさい、マスター……』」

直後、明日香は先ほどまで持っていた槍から炎を噴出し、かなりの速度で飛び去った。

行つたな

宗介の右目の炎が消え、いつもの目に戻る。

ナガが普通の黒ア、カツバチが青波ト同様薄緑色

ちなみに、音波の周波の色が元から薄緑色だと、これが今度は一

た。

「そういえば俺、音波の顔しつかり見たのって初めてだよな」

一
キモ

誤解だ誤解！ しくしく俺でも視姦にしない！」

「月日」の明、終焉全交集六三

「同上」

「ああ。ジジが男刀を奪うが話す。舞刀はクラヅメバー金剛で

上がるが、話すのは俺一人で十分だ

Γ Γ Γ Γ

「な、なんだよ」

嫌な予感しかしない」

失礼な
しゃ
今日はこれで解散！また明日

あかねの日記

右手をひらひらと振りながら昭彦は家に帰つて行つた。

帰り道。俺と笛吹姉弟は3人で肩を落としていた。

「はあ…」

余計な事しなけれど、いいけど

「考えてみる。アイツが余計な事以外した例あるか？」

「また明日から大変になるぞ」

「大変なのは元からでしょ」

音波のツツ「ミミ」に頷く。確かに、昭彦とつるみ始めてから毎日が大変だった。

だがしかし、俺は過去の思い出に浸つてこむほど暇じゃない。もつと大変な問題がある。

「明日香が…TOS…俺の妹が…TOS…」

開幕前夜（後書き）

石「おい昭彦。今回からこのスペース、次回予告に使つりじい
昭「次回予告？いつネタが切れるかもわからない状況でよく言つた
もんだ」

石「まつたくだ。で、次回予告つて何すればいいんだ？」

昭彦「次回の予告すればいいだろ」

石「そのまんまだな」

昭&石「次回！『施行！勝進制度』」

昭「石和の隠された過去が明らかに！！」

石「ならねえよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7471j/>

DNAクラブ！！

2011年11月21日06時47分発行